

実践する「愛と生命」

——「利他主義」の中に私を見出して——

ろう ぜい こう

妻 正綱 Grace Z. G. Lou

聞き手: 佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多: 妻さんは中国黒龍江省のお生まれで東京をベースに「書」と「画」の創作活動を国際的に展開されていますが、世に出るきっかけはなんだったのでしょうか?

妻: 私は3歳の頃から書家の父に厳しい指導を受けていました。紙は高価ですから、新聞紙を使ったり、また自分で考えた練習方法ですが、コンクリートの床の上に水で書の練習をしていたこともあります。この練習方法は、最近みなさんがとり入れています、私が最初なのです。肘が固定されないで、スケールの大きな書になるというメリットもありました。そして12歳のときに父と栄宝齋(書紙や筆を売っている北京の文房具の専門店)に紙を買いにいったのですが、「そんなにたくさん誰が使うのか」と聞かれて、父が「娘が使うのです」と答えて驚かれました。書の紙というのは決して安い物ではありませんから、そんな小さい娘に使わせるということが不思議だったのですね。そのときたまたま書の代表団が栄宝齋を訪れて書の交流会のようなものがあり、みなさんの前で書を披露しました。そうしたらみなさんびっくりされて、たった一日で天才少女として有名になってしまいました。

佐多: 日本に來られたのはいつ頃ですか?

妻: 19歳のときでしたから、もう15年になります。行き詰まりを感じていて、それで中国を離れる決心をしました。中国以外では日本が一番最初に私を評価してくれた国でしたから、日本に渡ることになりました。汽車が香港に向かって発車するときに、父には「成功しなかったらもう戻らない」とはっきり告げました。

佐多: ここ数年、「書は人なり、絵は心の声」と説かれながら、「愛と生命」というテーマで作品を発表されていますが、なにか理由があるのでしょうか?

妻: 30歳になった頃にマネージメントをお願いしていた方が、私の人脈とか色々なものを持って独立してしまい、裏切られて私は深く傷つきました。しばらくはもう死んだほうがいいかなと、思

い詰めるくらい辛い時期でした。でも死ぬませんでした。そしてそのときに、生きるということと愛について深く考えたのです。自分がこうしてやられているのも、ここまで色々な縁があって、色々な方々に助けられて、愛の上に自分が成り立っているということに気が付いたのです。

佐多: 夢でなにか見られたそうですね。

妻: 夢の中で占い師の女性が出てきて、おみくじをひかされたのです。2つの漢字が書かれていて、孤独の「孤」と「波」でした。多分今考えてみるとこうだろうと思うのですが、書や絵をかくという作業はたった一人です。小さい頃からずっと一人で練習をしてきて、私はずっと孤独に耐えてきました。そういう意味での「孤」と、私の人生はとても波があるという意味での「波」ですね。今度自叙伝を出すことになっていて、表紙の帯にも書くことになっていますが、「天国に長くいると地獄の味がする。地獄に長くいると天国の味がする」という言葉があります。小さい頃から多くの方に支援されてここまでやってきたけど、辛い時期にその恵まれていた分だけ地獄も味わったということ。それから常に原点にすることが大切、ということを実感しているのです。占い師の女性にこうも言われました。「あなたの人生は他人のための人生なのだから、余計なことを考えて思い煩わなくてもよい」と。それで目が覚めて、とても気持ちが楽になったのです。

佐多: 他人のことをもっと考えなさいというメッセージ、「利他主義」ということですね。ドライ・ラマから直接同じことをうかがったことがあります。

妻: 他人のためになにかをしてあげたいという気持ちは昔から強かったのですが、自分の人生を振り返ってみて、父の指導がなかったら、そして国が支援してくれなかったら、今の私はなかったと思います。それで、私も才能ある子供たちを応援しようと考えたのです。私もそうでしたが、中国では才能ある子は豊かな家にはいないのです。そこで「正綱芸術教育発展基金」を98年に中国教育部(日本の文部科学省にあたる)の協力の下に設立しました。基金



妻 正綱 / ろう・せいこう Grace Z.G.Lou

1966年：黒龍江省生まれ

1979年：12歳にして、中国政府の特別許可により中央美術学院に入学。書家として本格的な活動を開始する

1981年：カナダのオタワで初の海外個展を開催

1986年：19歳で来日

日中文化の架け橋として書画展を開催するとともに、「正綱芸術発展基金」を設立するなどして、後進の指導にも力を入れている。作品は30ヶ所以上の博物館、美術館に收藏されている

2001年7月：自伝『心』を世界文化社から出版予定



では「正綱芸術実験学校」を作り才能ある子供に芸術を教えています。

佐多：学校として成功すれば、これから全国展開していくわけですね。そうやって妻さんがお父様に指導を受けたように、子供たちの教育にも力を入れておられるわけですが、やはり書やその他の芸術にしても、才能が一番大切なのではないですか。

妻：そうですね。人間は気付いていないだけで、一人一人違う才能を持っています。しかし、才能があるだけではだめで、やはり教育や訓練が必要です。今の私があるのは父の指導のおかげで、父には感謝し、また尊敬もしていますが、父に会うと父の厳しい指導のこと、辛いことを思い出して、今でも打ち解けることができません。でもあの指導がなければ忍耐力もなく、ここまでこられなかったと思います。

佐多：今、日本でも教育に関して色々言われていますが、やはり大事なものは家の教育ですね。親というのは子供をみていないといけないと思います。この子はどんな才能を持っているのか、もっと親が子供をみる訓練をしなくちゃいけない。近藤千恵さんという方が、「親業訓練」の活動の創始者である米国のトマス・ゴードン博士の意志を生かして、日本でも80年に親業訓練協会(注)を設立し、自ら理事長としてご活躍になっているのですが、今更ながらそのお仕事の大切さを思い知らされています。

妻：そうですね。子供が小さい頃将来なりたいと思っていた夢から、大きくなるにつれてどんどん遠くなっていきます。子供のなにかになりたいという夢は親子が一つになって育んでいきたいものですね。

佐多：実際に学校で書を教えたりされるのですか？

妻：いいえ、基本的には教えません。細かく教えるよりも、子供たちの精神的な支えになれればいいと考えています。今苦しくても、20年後は私のようにこうやって自分の夢を実現できますよ、という具体的な存在として私がいればいいかなと。

佐多：卒業していく子供たちのこれからの活躍を考えると楽しみですよね。妻さんはそうして世界中で認められるようになったわけですが、自分の書いた一筆一筆に値段がつくと考えてみると不思議な感じがしませんか？

妻：私の作品の値段は日本でもアメリカでも中国でも全く同じにしています。父に知り合いには安く書いてやって欲しいと頼まれることがありますが、これは絶対にしません。私の作品の値段は私がつけているわけではなく市場がつけているものですが、私の作品を正当に評価して買って戴いているお客様に対して、私にはその価値を維持する責任があります。同じ理由で、自分が納得できない作品はすべて廃棄します。私はバブルのときでも自分の作品の価格を高くはしませんでしたし、世の中が大変な時代だといっても安くはしません。

佐多：妻さんの話を伺っていると、まさに「愛と生命」という言葉を実感します。実は我が社は「生命力」を経営理念にしています。色々なものに生命力というものは存在します。会社も生命力が必要です。そのことを社員にも意識して仕事をしてもらいたいと考えているのです。

妻：私は多くの経営者の方々から支援を受けてきています。みなさん立派な方ばかりですが、10年位前にお会いしていた日本の経営者のほうが理念をお持ちになっていたように思います。社会あつての会社なのに、最近は会社ばかりになってしまっているというか。佐多さんが経営理念をしっかり持っておられることは立派だと思います。

佐多：ありがとうございます(笑)。私も妻さんのように、「愛と生命」を実践していく人生にしたいものです。

(注) 親業訓練協会事務局

〒107-0062 東京都港区南青山7-10-3 南青山STビル2F
TEL: 03-3409-8355 FAX: 03-3409-8688
URL: <http://www.oyagyo.or.jp/>